

[講演要旨]

静岡市付近の宝永津波史料一波高推定の可能性をさぐる一

磯田道史（静岡文化芸術大学）

1707年宝永津波の静岡市駿河区下島における波高推定が可能と思われる史料について報告する。下島（駿河国有渡郡下島村）は静岡市中心部に最も近い海岸部で、1854年安政津波の波高は4.5m＝羽鳥(1977)とされるが、宝永津波の波高は知られていない。しかし、『新収日本地震史料』に〔静岡新聞社提供文書〕として「乍恐口上書を以申上候」という下島村の名主の報告が掲載されている。①稲束2275把の流出②百姓3人の家の上を津波で小舟が通過、③百姓3人の家のうち2軒が破壊されたことが記され、この史料には「大浪之高サ四丈（12m）」との記述があり『静岡県史 自然災害誌』でも言及されているが、原本・現地調査とあわせた史料の批判的検討が待たれていた。この史料の写真版を静岡県中央図書館歴史文化情報センターで確認し、『新収日本地震史料』の誤読・誤植を正すと、「村より南浜方地形少々高跡々より浪打上不申候場所」が上記の流出した百姓3人の家の立地場所とわかった。現地調査により同地の望月光夫家文書「明治26年地籍図」を発見。照合した結果、小字「塩入田」の南方、砂丘背後の狭小小字「大浜村」（図中A＝海拔4~4.6m）にあった百姓家3軒中2軒が流出したと判明。図中B＝海拔6mの集落本体には被害が報告されていないことから、下島における宝永津波の波高は5.5~6mと推定しておきたい。

